

学生とつくる「ほいく・あーと・ふえすた」へ

関西女子短期大学保育学科 准教授 宇津木 七実



保育の現場では、子どもの遊びの中の造形表現活動と、子どもの自発性を尊重しながらも保育者がねらいをもって計画する造形表現活動があります。保育者を目指す学生は、乳幼児の造形表現活動を計画するにあたって、環境を通して行う幼児教育の特性、領域「表現」のねらいや内容、他の領域との関連性、指導や援助の方法、環境設定や材料用具、造形表現の意義、乳幼児の発達等、様々な知識や技能を学んでおく必要があります。それらに加え養成期間に、子どもに豊かな表現を育むために学んだ知識や技能を活かしたい!という意欲や、具体的な指導場面をイメージする力等、保育者としての資質や能力を培うことも期待します。そのためには、子どもとふれあい、子どもに関わりながら乳幼児期の子どもの姿を実感することが大切だと考えます。学生へ「普段から乳幼児期の子どもの関わる機会があるか?」とアンケートで質問すると、「保育関係のボランティアやアルバイトをしている」「きょうだいや親戚に乳幼児がいる」といった回答は、少数しか返ってきません。ほとんどの学生は、都市化、核家族化、少子化、子どもの遊びの変化などの社会状況下で、成長期に乳幼児と関わる機会がないまま保育者養成校にやってくるようです。多くの養成校では実習はもちろん、実習以外でも学生が子どもと関わる機会を様々な形で設けています。本校でも、もともと音楽と造形の成果発表の場であった学科行事「ほいくふえすた」を、学生と子どもとがふれあう実践的経験での知識習得の機会に変えてきました。2011年度からは、音楽の発表会「定期演奏会」と日時を別に「ほいくふえすた・造形作品展」として学内で実施することになりました。学生が試行錯誤して制作した作品が展示され、地域にも開放していたにも関わらず、学生の積極的な参加や地域との交流は見られませんでした。そこで、筆者が専任として着任した年から、作品展示に併せ、学生ボランティアと「子どものためのアートワークショップ」を企画実施しました。



学生の制作した遊具



展示作品とアートワークショップ



ミニシアター

ボランティアをした学生からは、「子どもがかわいい」「附属幼稚園観察実習で接したクラスの子どもに、再会できてうれしかった」という、子どもと関わった喜びの感想や、かいたり、つくったりしている子どもの姿を興味深く観察したことがわかる内容の感想が聞かれました。



「工所用パネルに絵をかこう！」



「お菓しのいえを飾ろう！」

また、「ほいくふあすた」会場前が工事となった際に行った「工所用パネルに絵をかこう！」では広い空間で自由に描く子どもの姿を観察することができたり、ゼミ制作展示作品に関連付けた「お菓しのいえを飾ろう！」では、意図した環境によって子どものつくりたい気持ちを引き出せることを学べたり、その時々の内容や参加人数などの状況によって違いはありますが、学生は子どもの造形表現活動の指導に関連する学びを、子どもとふれあう実践体験を通して得ることができました。

2018年度からは、「子どものためのアートワークショップ」に1年生全員が参加する学生主体の行事として、またゼミ教育科目である「基礎演習Ⅱ」の授業として実施されています。行事の目的が、学生の学習成果発表から、子どもとふれあう体験学習へ大きく変わりました。行事の名称も「ほいく・あーと・ふえすた」になりました。以前は、企画も造形関連の授業を担当する教員中心で行っていましたが、選出された実行委員の学生が、造形活動やミニシアターの内容を計画、材料を準備する段階から参加することになりました。ゼミのグループでの学習としての意味も加わり、造形関連の授業を担当する教員以外も、学生の指導に携わります。



学生手作りの紙バックでお出迎え



コロナ禍での関わり

2019年度の学生の振り返りでは、子どもの表現する場面に立ち合い、子どもはかいたり、つくったり、聞いたりすることに一生懸命になる、一人ひとり違う表現をする等の感想や、「準備の段階で子どもたちがどうすれば楽しめるのかをよく考えておく」「子どもたちの年齢によって説明の仕方が少し難しか

った」、「年齢がバラバラだったので一人ひとりに合った援助の仕方に戸惑う」等、事前の材料準備や教材研究、指導や援助は子どもや状況に合わせて工夫が必要であること等、乳幼児の造形表現活動の指導をするにあたって、理解しておくべき知識や技能について自身の体験から気づいた感想が見られました。「アートワークショップ」での子どもとふれあう体験によって、具体的な指導場面がある程度イメージできるようになったのではないかと推測されます。また「子どもたちにどのような活動したり（すれば）たのしんでくれるか皆で考えた（文中のカッコ内は、筆者の解釈）」等の記述もあり、子どもたちのためにワークショップを成功させようと、各自の役割を果たしながらゼミの仲間と協力して問題解決し、実際の体験によって達成感を味わったことも窺えました。



毎年人気の「ガラスに絵をかこう！」



各実行委員の提案作品（話し合い選考）

ここ3年間はコロナ禍で、人数や時間、内容や関わり方の制限をしながら実施しています。しかし、子どもとふれあう学生たちの顔は、いつも生き生きとしています。材料用具経験の少ない1年生が提案する造形内容は、子どもにとっては表現の自由度が低くなる傾向がある等の課題はありますが、乳幼児期の子どもの造形表現活動をより豊かに計画展開できる保育者になるための、実践的経験での知識習得の機会となるよう、今後も学生たちと「ほいく・あーと・ふえすた」を育てて行きたいと考えています。